

ロームミュージックファンデーション スカラシップ コンサート

～はじまり～

次世代を担う若き音楽家たちが、
国内外で学んだ奨学生期間中の成果を披露！

京 都 公 演 Kyoto

2025

7月 **26** 日 [土] Vol.52

8月 **23** 日 [土] Vol.54

京都府立府民ホール
アルティ

後援：京都府／京都市／NHK京都放送局／
一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

東 京 公 演 Tokyo

2025

8月 **3** 日 [日] Vol.53

8月 **30** 日 [土] Vol.55

浜離宮朝日ホール

後援：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会



■アーカイブ配信のお知らせ

クラシック専門ストリーミングサービス カーテンコールにて、
期間限定のアーカイブ配信を実施します。

アーカイブ配信チケット 500円

購入方法、視聴方法については、「カーテンコール」の
サイト内にてご確認ください。



2025年のテーマは～はじまり～

ローム ミュージック ファンデーションの奨学生である新進気鋭のアーティストが、
「はじまり」をテーマに極上の調べをお届けする4日間。
鍵盤・弦・管楽器、声楽や音楽学など幅広い分野によるソロやアンサンブルの演奏で、
「はじまり」に溢れたクラシックの名曲をお楽しみください。

ごあいさつ

この度は、ローム ミュージック ファンデーション スカラシップ コンサートにご来場いただき、誠にありがとうございます。

公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーションは音楽文化の普及と発展を目指し、活動を行っています。

1991年の財団設立以来実施している奨学援助事業では、500名を超える音楽家を世界中に送り出してまいりました。

このコンサートでは、そんな奨学援助事業で支援した2024年度奨学生が、1年間の「学びの成果」を披露いたします。

新進気鋭の若手音楽家たちのエネルギッシュな演奏をお楽しみいただき、今後のさらなる活躍をあたたく見守ってくださることを願っています。

公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション



公 演 一 覧

京 都 公 演

7月26日[土]

Vol.52

開演 14:30
開場 14:00
終演予定 17:45

栗原	峻希	〔バリトン〕
小嶋	早恵	〔ピアノ〕
佐川	和冴	〔ピアノ〕
重森	光太郎	〔ピアノ〕
瀬	千恵美	〔クラリネット〕

谷口	知聡	〔ピアノ〕
樽谷	公平	〔ピアノ〕
中野	りな	〔ヴァイオリン〕
山田	唯雄	〔クラシックギター〕
横山	和美	〔ソプラノ〕

8月23日[土]

Vol.54

開演 14:30
開場 14:00
終演予定 18:50

荒井	里桜	〔ヴァイオリン〕
五十嵐	健太	〔サクソフォン〕
牛田	智大	〔ピアノ〕
奥井	紫麻	〔ピアノ〕
奥田	ななみ	〔ピアノ〕
笠井	大暉	〔ヴィオラ〕
亀居	優斗	〔クラリネット〕
北村	陽	〔チェロ〕
坂口	由侑	〔ピアノ〕

島多	璃音	〔ピアノ〕
白井	翼	〔チューバ〕
東方	理紗	〔オルガン〕
戸澤	采紀	〔ヴァイオリン〕
保科	瑠衣	〔ソプラノ〕
松岡	井葉	〔ヴァイオリン〕
室元	拓人	〔作曲〕
安並	貴史	〔ピアノ〕
山本	航司	〔サクソフォン〕

(五十音順)

東 京 公 演

8月3日[日]

Vol.53

開演 15:30
開場 14:45
終演予定 18:30

荒井	里桜	〔ヴァイオリン〕
五十嵐	健太	〔サクソフォン〕
奥井	紫麻	〔ピアノ〕
栗原	峻希	〔バリトン〕
小嶋	早恵	〔ピアノ〕
佐川	和冴	〔ピアノ〕

瀬	千恵美	〔クラリネット〕
谷口	知聡	〔ピアノ〕
保科	瑠衣	〔ソプラノ〕
松岡	井葉	〔ヴァイオリン〕
室元	拓人	〔作曲〕
山田	唯雄	〔クラシックギター〕

8月30日[土]

Vol.55

開演 15:30
開場 14:45
終演予定 18:20

奥田	ななみ	〔ピアノ〕
笠井	大暉	〔ヴィオラ〕
亀居	優斗	〔クラリネット〕
坂口	由侑	〔ピアノ〕
重森	光太郎	〔ピアノ〕
島多	璃音	〔ピアノ〕

白井	翼	〔チューバ〕
樽谷	公平	〔ピアノ〕
安並	貴史	〔ピアノ〕
山本	航司	〔サクソフォン〕
横山	和美	〔ソプラノ〕

(五十音順)

研 究 発 表

千葉 豊〔音楽学〕

※出演予定でしたメゾソプラノ金子紗弓は都合により出演できなくなりました。予めご了承ください。



F.クライスラー/S.ラフマニノフ：愛の悲しみ、愛の喜び ――― 小嶋 早恵 [ピアノ]

L.v.ベートーヴェン ：ヴァイオリン・ソナタ 第4番 イ短調 Op.23 ――― 中野 りな [ヴァイオリン]、佐川 和冴 [ピアノ]

R.シュトラウス ：歌劇「ナクソス島のアリアドネ」Op.60 TrV228a より“偉大なる王女様”
――― 横山 和美 [ソプラノ]、谷口 知聡 [ピアノ]

F.リスト ：巡礼の年 第2年 イタリア S.161/R.10b より 第7曲 ソナタ風幻想曲「ダンテを読んで」
――― 重森 光太郎 [ピアノ]

――休憩――

J.ブラームス ：パガニーニの主題による変奏曲 Op.35-2 ――― 佐川 和冴 [ピアノ]

J.ブラームス ：クラリネット・ソナタ 第2番 変ホ長調 Op.120-2 より 第2、3楽章
――― 瀬 千恵美 [クラリネット]、小嶋 早恵 [ピアノ]

権代 敦彦 ：ピアノのための《カイロスーその時―》(2011) ――― 谷口 知聡 [ピアノ]

――休憩――

B.ブリテン ：ダウランドによるノクターナル Op.70「来たれ、深き眠りよ」によるリフレクション
――― 山田 唯雄 [クラシックギター]

M.I.グリンカ ：夜想曲 変ホ長調
S.ラフマニノフ ：楽興の時 Op.16 より 第4、5、6番 ――― 樽谷 公平 [ピアノ]

G.ヴェルディ ：歌劇「ファルスタッフ」より“夢か？まことか？”
G.ロッシーニ ：歌劇「セヴィリアの理髪師」より“私は町のなんでも屋” ――― 栗原 峻希 [バリトン]、小嶋 早恵 [ピアノ]



小嶋 早恵 Sae Kojima [ピアノ]

2024年度奨学生
東京藝術大学大学院

第91回日本音楽コンクールピアノ部門第1位。あわせて三宅賞、井口賞、野村賞、河合賞、アルゲリッチ芸術振興財団賞受賞。東京藝術大学および同大学院修士課程を4つの賞を受賞しそれぞれ首席で卒業・修了。同大学大学院後期博士課程在籍中。有森博氏、浦壁信二氏に師事。

©Ayane Shindo

この2作品の原曲は、クライスラーが作曲した、ヴァイオリニストならではの感性が光る愛らしい小品です。ラフマニノフによってピアノ独奏版へと編曲され、ピアノならではの重厚な響きが増えられることで、さまざまな表情を新たに纏い、より豊かで奥行きのある世界が立ち上がっています。作品が新たに生まれ変わる瞬間もまた、音楽が生まれるとき――すなわち“はじまり”と呼べるのかもしれませんが。編曲というかたちで結ばれた2人の音楽家の対話を感じながら、いっそう魅力を増した2つの作品を、どうぞお楽しみください。



横山 和美 Kazumi Yokoyama [ソプラノ]

2024年度奨学生
ウィーン市立音楽芸術大学

東京藝術大学大学院博士課程修了。ウィーン市立音楽芸術大学卒業。第86回日本音楽コンクール声楽部門第2位、岩谷賞。文化庁令和2年度新進芸術家海外研修制度研修員。

©FUKAYA Yoshinobu auraY2

リヒャルト・シュトラウスの《ナクソス島のアリアドネ》は、悲劇と喜劇が交差する作品です。ツェルビネッタのアリア「偉大なる王女様」は、失恋に沈むアリアドネに「新たな恋が始まる」と語りかけます。超絶技巧のコロラトゥーラとユーモアにあふれた語り口が魅力で、「終わりの先には“はじまり”がある」という希望を伝えるアリアです。



佐川 和冴 Kazusa Sagawa [ピアノ]

2024年度奨学生
ハンス・アイスラー音楽大学ベルリン

東京音楽大学並びに同大学院を首席で修了。第21回東京音楽コンクールピアノ部門第1位。第90回日本音楽コンクールピアノ部門第2位。霧島国際音楽祭賞、IMA音楽賞等受賞。現在ハンス・アイスラー音楽大学修士課程に在籍しエルダー・ネボルシン氏に師事。

©Tetsuya Okukawa

ブラームス自身が「音楽的な内容よりも、技巧に焦点を絞って徹底的にやってみたらどうなるか?」という興味で作曲したと語っており、その言葉通り、技巧的に難しくヴィルトゥオーゾな作品です。パガニーニの有名なテーマを演奏した後、14の変奏曲が奏でられますがひとつテーマから“はじまり”、さまざまなキャラクターや音楽の広がりを感じられる作品です。



中野 りな Lina Nakano [ヴァイオリン]

2023、2024年度奨学生
ウィーン市立芸術大学、桐朋学園大学

第90回日本音楽コンクールおよび第8回仙台国際音楽コンクールで優勝。桐朋学園大学ソリスト・ディプロマ・コースに在学中。使用楽器は1702年製アントニオ・ストラディバリウス<ライアル> (財団法人ITHOより貸与)。

©Kisekimichiko

私はこの秋から、本格的に留学生生活を始めます。その新たな“はじまり”に向けて、クラシック音楽において最も重要な作曲家のひとりであるベートーヴェンを学びたいという思いから、今回の演奏作品を選びました。この作品は、1800年ころ、彼が聴覚の異変に気づきながらも、それを周囲に明かさず苦しんでいた時期に作られました。激しいコントラストが魅力のひとつだと思いますが、それには当時のベートーヴェンの心の動きが映し出されているのかもしれません。少しでもお楽しみいただけましたら嬉しいです。



重森 光太郎 Kotaro Shigemori [ピアノ]

2024年度奨学生
パリ・エコールノルマル音楽院、桐朋学園大学

2022年ロン＝ティボー国際コンクールピアノ部門第4位など多数のコンクールにて上位入賞。ソリストはじめ、伴奏や室内楽においても積極的に取り組み、「ピアノの本」にて留学誌のコラムを掲載するなど、多方面にて活動。

©Junichiro Matsuo

巡礼の年(7曲)の一番最後の作品。前の6曲よりも遥かに規模が大きい作品でもあり、圧倒的な迫力や技術が魅力的で、名曲の一つでもあります。題にあるように、ダンテ(1265-1321)の叙事詩『神曲』を読み、そこからインスピレーションを得て創作されました。ダンテの『神曲』は、「地獄篇」「煉獄篇」「天国篇」の三部から構成されています。本曲の冒頭では地獄の世界への幕開けのように、中世の多声音楽より「音楽の悪魔」と呼ばれる増4度音程の下行が、繰り返しあらわれます。激しい苦悩や葛藤の場面以外にも、美しく穏やかな旋律もあり、最後は輝かしく締めくくります。色々な場面性を工夫を凝らしながら皆様にお届けできますこととても楽しみにしています。





瀬 千恵美

Chiemi Se

〔クラリネット〕

2024年度奨学生

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団カラヤン・アカデミー

東京藝術大学卒業後、ザルツブルク・モーツァルテウム大学修士課程に在籍。第10回日本クラリネットコンクール第3位。チロル音楽祭アカデミー第1位、現在ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団カラヤン・アカデミー奨学生。

意欲を無くし約3年間作曲活動をしなかった晩年のブラームスは、ヴァイオリン奏者でありながらクラリネットの名手でもあるミュールフェルトとの出会いを“はじまり”にして1890年の作品111から作品114、115のクラリネット三重奏、そして今日演奏する作品120のクラリネット・ソナタまで途切れることなく立て続けて作曲しました。オーケストラ作品の合間に作曲していた室内楽曲に、この期間は集中的に取り組み、複雑さと美しさのなかに込めたブラームスの思いを馳せながら演奏したいと思います。



山田 唯雄

Io Yamada

〔クラシックギター〕

2018、2024年度奨学生

ウィーン国立音楽大学、

ワイマール・フランツ・リスト音楽大学

第55回ミケーレ・ピッタルーガ国際ギターコンクール、第48回Dr.ルイス・シガール国際音楽コンクール優勝。そのほか20を超えるコンクールにて入賞。ワイマール・フランツ・リスト音楽大学演奏家資格課程 (Konzertexamen) に在籍。

ベンジャミン・ブリテンが初めて完成させたギター作品。16世紀に活躍したイギリスのリューティスト、ジョン・ダウランドによる歌曲「来たれ、深き眠りよ」に基づく変奏曲で、ブリテンの他の作品にもしばしば登場する「眠り」「夢」そして「死」と言ったテーマがここでも扱われています。本作は、さまざまに変容されたテーマ素材によって展開される8つの変奏のあと、最後に主題が完全な形で現れます。その様子はあたかも“はじまり”に向かって進行していくように聞こえます。



栗原 峻希

Takaki Kurihara

〔バリトン〕

2022、2024年度奨学生

サン・カルロ歌劇場研修所、V.ベッリーニ研修所

東京藝術大学大学院卒業。レナータ・スコット演出《蝶々夫人》、サン・カルロ歌劇場《ドン・カルロ》に出演。E.ガランチャ、L.デジエ、M.ペルトウージ等と共演。イタリア声楽コンクール1位等受賞多数。文化庁新進芸術家海外研修制度研修員。

人生の転機や物語の“はじまり”を描いた二曲をお届けします。ヴェルディ《ファルスタッフ》より〈夢か?まことか?〉では妻の浮気の嫉妬に揺れるフォードの疑念が、物語を動かすきっかけとなります。ロッシーニ《セヴィリアの理髪師》より〈私は町のなんでも屋〉では、フィガロの登場が恋の騒動の幕開けを告げます。



谷口 知聡

Chisato Taniguchi

〔ピアノ〕

2023、2024年度奨学生

パリ国立高等音楽院

2022年に第15回オルレアン国際ピアノコンクールで第2位を受賞後、ラ・フォル・ジュルネやヴェネツィア・ビエンナーレ、ハンブルクのアルグリッチ音楽祭などの主要国際音楽祭に招かれリサイタルを行う。

東日本大震災の直後に書かれた作品です。追悼や復興の文脈で語られることも多いデリケートな題材ですが、この作品はあくまで人間にはとても及ばない自然の凄まじいエネルギーの描写に焦点をあてることで、あの瞬間そのものを、どんな背景を持つ人でも客観的に追体験することができるという点で唯一無二の作品です。演奏者としての歩みの“はじまり”を与えてくださった権代作品、カイロス初演の地でもあるこの会場（府民ホール アルティ）で本作品を皆様と共有できますことを心より幸せに思います。



樽谷 公平

Kohei Taruya

〔ピアノ〕

2024年度奨学生

チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院

大分県別府市出身。第29回ヨハネス・ブラームス国際コンクール第3位、日本音楽コンクール第3位等さまざまなコンクールで入賞。現在チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院に在籍し、エリソ・ヴィルサラゼ氏の元で更なる研鑽を積んでいる。

人生で“はじまり”は何度か訪れるものだと思います。私にとってはモスクワへの留学が新たな“はじまり”でした。今回演奏する2曲はモスクワ留学後初めて取り組んだロシア作品です。皆様に少しでもロシア音楽の良さが伝われば幸いです。



(出演順／学校名は奨学金給付時の在籍校)

B.ブリテン

：ダウランドによるノクターナル Op.70「来たれ、深き眠りよ」によるリフレクション

山田 唯雄〔クラシックギター〕

F.J.ハイドン

：ピアノ・ソナタ 第49番 嬰ハ短調 Hob.XVI:36

佐川 和冴〔ピアノ〕

F.メンデルスゾーン

：演奏会用小品 第2番 ニ短調 Op.114

：演奏会用小品 第1番 ヘ短調 Op.113

瀬 千恵美〔クラリネット〕、五十嵐 健太〔サクソフォン〕、小嶋 早恵〔ピアノ〕

—休憩—

室元 拓人

：凍てつく火花＜改訂初演＞

谷口 知聡〔ピアノ〕

：シュヴイムシヒテンー虹の幻影＜世界初演＞

瀬 千恵美〔クラリネット〕

K.シマノフスキ

：神話 3つの詩 Op.30 より 第2番 ナルキッソス、第3番 ドリュエスとパン

松岡 井菜〔ヴァイオリン〕、小嶋 早恵〔ピアノ〕

W.A.モーツァルト

：モテット「踊れ、喜べ、幸いなる魂よ」 K.165

保科 瑠衣〔ソプラノ〕、奥井 紫麻〔ピアノ〕

—休憩—

F.リスト

：メフィスト・ワルツ 第1番「村の居酒屋での踊り」 S.514/R.181

奥井 紫麻〔ピアノ〕

R.シューマン

：ピアノ三重奏曲 第3番 ト短調 Op.110 より 第1、2、4楽章

荒井 里桜〔ヴァイオリン〕、谷口 知聡〔ピアノ〕、佐山 裕樹★〔チェロ〕

G.ヴェルディ

：歌劇「ファルスタッフ」より “夢か?まことか?”

G.ロッシーニ

：歌劇「セヴィリアの理髪師」より “私は町のなんでも屋”

栗原 峻希〔バリトン〕、小嶋 早恵〔ピアノ〕

★:過去の奨学生



©Guido Werner

山田 唯雄 Io Yamada [クラシックギター]

2018、2024年度奨学生

ウィーン国立音楽大学、
ワイマール・フランツ・リスト音楽大学

第55回ミケーレ・ピッタルーガ国際ギターコンクール、第48回Dr.ルイス・シガール国際音楽コンクール優勝。そのほか20を超えるコンクールにて入賞。ワイマール・フランツ・リスト音楽大学演奏家資格課程 (Konzertexamen) に在籍。

ベンジャミン・ブリテンが初めて完成させたギター作品。16世紀に活躍したイギリスのリュートイスト、ジョン・ダウランドによる歌曲「来たれ、深き眠りよ」に基づく変奏曲で、ブリテンの他の作品にもしばしば登場する「眠り」「夢」そして「死」と言ったテーマがここでも扱われています。本作は、さまざまに変容されたテーマ素材によって展開される8つの変奏のあと、最後に主題が完全な形で現れます。その様子はあたかも“はじまり”に向かって進行していくように聞こえます。



©Peter Adamik

瀬 千恵美 Chiemi Se [クラリネット]

2024年度奨学生

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団カラヤン・アカデミー

東京藝術大学卒業後、ザルツブルク・モーツァルテウム大学修士課程に在籍。第10回日本クラリネットコンクール第3位。チロル音楽祭アカデミー第1位、現在ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団カラヤン・アカデミー奨学生。

バセットホルン、クラリネットとピアノのために書かれた作品です。高校のときに一度アルトサクソ、ピアノと演奏したことがあり、それが初めてメンデルスゾーンを演奏する機会でした。クラリネットのための作品がありませんのでメンデルスゾーンを演奏できる機会はありませんのですが、昨年はベルリンのお墓を訪問したり、今日演奏する作品と近い時期に書かれた交響曲第4番「イタリア」を1年間で4度演奏したことなどがあり、他の作品もよく聴くようになりました。そんな今、また久しぶりに演奏会用小品に取り組むことができることが楽しみです。新たな気持ちで演奏したいと思います。



©Ayane Shindo

小嶋 早恵 Sae Kojima [ピアノ]

2024年度奨学生

東京藝術大学大学院

第91回日本音楽コンクールピアノ部門第1位。あわせて三宅賞、井口賞、野村賞、河合賞、アルゲリッチ芸術振興財団賞受賞。東京藝術大学および同大学院修士課程を4つの賞を受賞しそれぞれ首席で卒業・修了。同大学大学院後期博士課程に在籍中。有森博氏、浦壁信二氏に師事。

メンデルスゾーンがこの2曲を書いたきっかけは、旅先で出会った音楽家たちとの交流でした。音楽家との出会いが、作品誕生の“はじまり”となったのです。親しみやすく生き生きとしたこの作品には、音楽を通して対話する楽しさや、奏でることの純粋な喜びが満ちあふれています。今回、私たちもこの公演を通して、初めてともに音を重ねます。作品の背景と同じように、新たな出会いから生まれる私たちの音楽の“はじまり”を、一緒に楽しんでいただけたら幸いです。



©Tetsuya Okukawa

佐川 和苒 Kazusa Sagawa [ピアノ]

2024年度奨学生

ハンス・アイスラー音楽大学ベルリン

東京音楽大学並びに同大学院を首席で修了。第21回東京音楽コンクールピアノ部門第1位。第90回日本音楽コンクールピアノ部門第2位。霧島国際音楽祭賞、IMA音楽賞等受賞。現在ハンス・アイスラー音楽大学修士課程に在籍しエルダー・ネボルシン氏に師事。

ハイドンのピアノ・ソナタ第49番の特徴は嬰ハ短調という珍しい調性と短調ならではの深い感情表現と緊張感のなかにある美しいメロディのコントラストです。晩年の作品に近づくにつれて、彼の音楽はより感情的で多層的になっていきます。このソナタはまさにその過渡期にあたる作品であり、ベートーヴェンやシューベルトにもつながる表現が見られます。初めてピアノ・ソナタというジャンルを勉強したのがハイドンの作品ですのでピアノ・ソナタに限らずさまざまな作品を勉強する“はじまり”の原点的な意味もあり選曲しました。



五十嵐 健太 Kenta Igarashi [サクソフォン]

2024年度奨学生

東京音楽大学大学院

群馬県出身。幼いときに父を亡くし、ウクライナ人の母親とともにキーウに移住。国内外で30以上の受賞歴を持ち、現在は演奏家として幅広く活動中。YANAGISAWAアーティスト。D'Addario Woodwinds日本公認アーティスト。

この作品は私が学生のころから憧れていた一曲でありクラリネットを演奏していた経験から特別な思い入れがあります。今回素晴らしい共演者とともにこの作品に挑戦できることを嬉しく思っています。またクラリネットとサクソフォンの組み合わせは珍しく多くの方にとって初めて聴く音色かもしれませんがドイツ音楽ならではの調和と対話を感じられる“はじまり”の瞬間として新鮮な印象をお届けできればと願っています。



©Ayane Shindo

室元 拓人 Takuto Muromoto [作曲]

2023、2024年度奨学生

フローニュ＝ビヤンクール地方音楽院、
グラーツ国立音楽大学

第37回現音作曲新人賞入選、第90回日本音楽コンクール第3位、第11回JFC作曲賞入選、2022年度武満徹作曲賞第1位。東京藝術大学、フローニュ＝ビヤンクール地方音楽院を経て、現在グラーツ国立音楽大学に在学中。

ピアノのための《凍てつく火花》は、幼少期に体験した線香花火の記憶に基づいており、ピアノの音の透明感に、瞬く火のイメージを重ね合わせた作品です。クラリネットのための《シュヴァムシヒテン》は、ドイツ語で「泳ぐ地層」という意味で、メノウと呼ばれる美しい化石から着想を得ました。石を叩く奏法によって“はじまり”、原始的な音から次第に石の複雑な模様が浮かび上がるような作品です。ぜひ、それぞれの演奏で作品をお愉しみてください。

(出演順／学校名は奨学金給付時の在籍校)



©Monarca studio

松岡 井菜 Seina Matsuoka [ヴァイオリン]

2024年度奨学生

ウィーン国立音楽大学大学院

第2回カコロ・シマノフスキ国際音楽コンクールをはじめ1年間に3つの国際コンクールで第1位を受賞。第28回青山音楽賞新人賞、第34回青山音楽賞バロックザール賞。ウィーン国立音楽大学室内楽科修士課程に在籍。

この作品はギリシャ神話を題材として書かれた標題音楽であり、ナルシストの語源となった絶世の美少年「ナルキッソス」や木々の精霊トリュアデス、牧神パンなど神話の登場人物が各楽章のテーマになっています。グリッサンドやハーモニクス、スルボンティチェロ等のヴァイオリンのさまざまな奏法を使って水や風のざわめき、バンフルートの音等が表現されています。私が初めて触れたシマノフスキの作品でもあり、彼の世界観に魅了される“はじまり”となった曲です。神秘的で美しいこの作品を楽しんでいただければ嬉しいです。



奥井 紫麻 Shio Okui [ピアノ]

2023、2024年度奨学生

グネーシン音楽大学、ジュネーヴ高等音楽院

故エレナ・アシュケナージ氏に師事し、12歳で渡露。グネーシン音楽学校ピアノ科を首席で卒業後、現在ジュネーヴ高等音楽院にてネルソン・グルナー氏に、グネーシン音楽大学にてタチアナ・ゼリクマン氏に師事。

今までにリストの作品は沢山弾いてきましたが、本作品ほど明るく技巧的にも華やかな曲を勉強するのは私にとって初めてです。今までに何度かこの曲に取り組もうとしてきたのですが、毎回他の予定に押されて時間が取れなかったので、今年こそはと譜読みを始める前に先にプログラムに入れてみました。個人的には悪魔的な難しさも持つこの作品との“はじまり”に今からドキドキしていますが、煌びやかな万華鏡の様に目まぐるしい踊りのシーンや幻想で魅惑されるような中間部を通してメフィストワルツをお楽しみいただければ嬉しいです。



©Mary Laure Jolibois

谷口 知聡 Chisato Taniguchi [ピアノ]

2023、2024年度奨学生

バリ国立高等音楽院

2022年に第15回オルレアン国際ピアノコンクールで第2位を受賞後、ラ・フォル・ジュルネやヴェネツィア・ビエンナーレ、ハンブルクのアルゲリッチ音楽祭などの主要国際音楽祭に招かれリサイタルを行う。

1851年に作曲されたシューマンの後期のピアノトリオ。二つのヴァイオリン・ソナタと同年に作曲されていることもあり実際に似た特徴も見られますが、他のピアノトリオと比べてヴァイオリンとチェロに対するピアノの関係が、ソナタのようなお互いに独立した関係に深まり、それぞれの楽器の発言力が増すことで円熟した音楽の会話が生まれているように思います。特にピアノistにとって室内楽の原点であるピアノトリオ、“はじまり”から新たな“はじまり”を踏み出せるよう、お互いの内なる声に耳を傾けたいと思います。



©Marcello Merenda

栗原 峻希 Takaki Kurihara [バリトン]

2022、2024年度奨学生

サン・カルロ歌劇場研修所、V.ベッリーニ研修所

東京藝術大学大学院卒業。レナター・スコット演出《蝶々夫人》、サン・カルロ歌劇場《ドン・カルロ》に出演。E.ガラランチャ、L.デジエ、M.ベルトウージ等と共演。イタリア声楽コンコロソ1位等受賞多数。文化庁新進芸術家海外研修制度研修員。

人生の転機や物語の“はじまり”を描いた二曲をお届けします。ヴェルディ《ファルスタッフ》より〈夢か?まことか?〉では妻の浮気の嫉妬に揺れるフォードの疑念が、物語を動かすきっかけとなります。ロッシーニ《セヴィリアの理髪師》より〈私は町のなんでも屋〉では、フィガロの登場が恋の騒動の幕開けを告げます。

(出演順／学校名は奨学金給付時の在籍校)

保科 瑠衣 Rui Hoshina [ソプラノ]

2024年度奨学生

イタリア国立パルマ音楽院

東京藝術大学、同大学院独唱科卒業。イタリア国立パルマ音楽院声楽科を満点賛辞付き、特別賛辞を受け卒業。現在同音楽院古楽科に在籍。サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団、フィレンツェ歌劇場管弦楽団等とソリストとして共演。



©FUKAYA Yoshinobu aura/2

モーツァルト《踊れ、喜べ、幸いなる魂よ》は、喜びと希望に満ち溢れた作品です。私自身のイタリア歌劇場デビューもモーツァルト作品であり、キャリアの“はじまり”を重ねてこの曲を選びました。初心を大切に、音楽の歓びをまっすぐ届けたいと思います。



荒井 里桜 Rio Arai [ヴァイオリン]

2023、2024年度奨学生

ローザンヌ高等音楽院、エリザベート王妃音楽院

東京藝術大学音楽学部特待奨学生、首席卒業。ローザンヌ高等音楽院卒業。東京音楽コンクール第1位および聴衆賞。日本音楽コンクール第1位。NHK交響楽団、読売日本交響楽団、ローザンヌ・シンフォニエッタほか多数共演。第17回ベストデビュータレント賞受賞。第20回ハチャトゥリアン国際コンクール第3位およびシューベルトインタープリテーション特別賞を受賞。

この作品はシューマンのヴァイオリン・ソナタ第1番と同じく彼の音楽家としての最盛期に書かれたましたが、それと同時に彼の精神が蝕まれ始めている時期でもありました。他の晩年の作品とともにシューマンの創造力の減退を示すものとされることもありますが、彼の活力と深い感情はまだ内側で強く秘めており、心の痛みと美しさが併存する唯一無二の作品です。また第2楽章はシューベルト以来の最も美しい表現楽章の一つに数えられています。



©Kosuke Atsumi

佐山 裕樹 Yuki Sayama [チェロ]

2021、2022年度奨学生／協力出演

第92回日本音楽コンクールチェロ部門入選。第13回ビバホールチェロコンクール第1位。チェロを宮田豊、倉田澄子の各氏に師事。桐朋学園大学音楽学部チェロ科を首席で卒業。現在、新日本フィルハーモニー交響楽団の首席チェロ奏者を務める。



F.リスト	：メフィスト・ワルツ 第1番「村の居酒屋での踊り」 S.514/R.181	———	奥井 紫麻 [ピアノ]
R.シューマン	：ヴァイオリン・ソナタ 第1番 イ短調 Op.105	———	荒井 里桜 [ヴァイオリン]、牛田 智大 [ピアノ]
A.I.ハチャトゥリアン	：ヴァイオリン、クラリネットとピアノのための三重奏曲	———	松岡 井菜 [ヴァイオリン]、亀居 優斗 [クラリネット]、坂口 由侑 [ピアノ]
M.ラヴェル	：「…風に」より 1.ボロディン風に、2.シャブリエ風に ：ラ・ヴァルス (ピアノ独奏版)	———	島多 璃音 [ピアノ]
W.A.モーツァルト	：モテット「踊れ、喜べ、幸いなる魂よ」 K.165	———	保科 瑠衣 [ソプラノ]、奥井 紫麻 [ピアノ]
—休憩—			
J.S.バッハ	：トッカータ、アダージョとフーガ ハ長調 BWV564	———	東方 理紗 [オルガン]
Z.コダーイ	：無伴奏チェロ・ソナタ Op.8 より 第3楽章	———	北村 陽 [チェロ]
B.マントヴァニ	：メタル	———	亀居 優斗 [クラリネット] 山本 航司 [サクソフォン]
室元 拓人	：凍てつく火花<改訂初演> ：シュヴィムシヒテンー虹の幻影<世界初演>	———	島多 璃音 [ピアノ] 亀居 優斗 [クラリネット]
A.S.アレンスキー	：ピアノ三重奏曲 第1番 ニ短調 Op.32 より 第1、3、4楽章	———	白井 翼 [チューバ]、安並 貴史 [ピアノ]、荒井 里桜 [ヴァイオリン]
—休憩—			
J.ブラームス	：4つの小品 Op.119	———	坂口 由侑 [ピアノ]
P.モーリス	：プロヴァンスの風景	———	五十嵐 健太 [サクソフォン]、安並 貴史 [ピアノ]
I.F.ストラヴィンスキー	：ピアノ・ラグ・ミュージック		
J.P.シェーニュ	：讃美歌IV<世界初演>		
S.プロコフィエフ	：トッカータ ニ短調 Op.11	———	奥田 ななみ [ピアノ]
G.フォーレ	：ピアノ四重奏曲 第2番 ト短調 Op.45 より 第2、3、4楽章	———	戸澤 采紀 [ヴァイオリン]、笠井 大暉 [ヴィオラ]、牛田 智大 [ピアノ]、水野 優也★ [チェロ]

★:過去の奨学生



奥井 紫麻 Shio Okui [ピアノ]

2023、2024年度奨学生
グネーシン音楽大学、ジュネーヴ高等音楽院

故エレーナ・アシュケナージ氏に師事し、12歳で渡露。グネーシン音楽学校ピアノ科を首席で卒業後、現在ジュネーヴ高等音楽院にてネルソン・ゲルナー氏に、グネーシン音楽大学にてタチアナ・ゼリクマン氏に師事。

今までにリストの作品は沢山弾いてきましたが、本作品ほど明るく技巧的にも華やかな曲を勉強するのは私にとって初めてです。今までに何度かこの曲に取り組もうとしてきたのですが、毎回他の予定に押されて時間が取れなかったので、今年こそとは譜読みを始める前に先にプログラムに入れてみました。個人的には悪魔的な難しさも持つこの作品との“はじまり”に今からドキドキしていますが、煌びやかな万華鏡の様に目まぐるしい踊りのシーンや幻想で魅惑されるような中間部を通してメフィスト・ワルツをお楽しみいただければ嬉しいです。



荒井 里桜 Rio Arai [ヴァイオリン]

2023、2024年度奨学生
ローザンヌ高等音楽院、エリザベート王妃音楽院

東京藝術大学音楽学部特待奨学生、首席卒業。ローザンヌ高等音楽院卒業。東京音楽コンクール第1位および聴衆賞。日本音楽コンクール第1位。NHK交響楽団、読売日本交響楽団、ローザンヌ・シンフォニエッタほか多数共演。第17回ベストデビュータレント賞受賞。第20回ハチャトゥリアン国際コンクール第3位およびシュベルトインタープリテーション特別賞を受賞。

この作品は1851年シューマンが41歳のときに作曲され、この時期に彼は音楽家として大きな社会的成功をおさめていましたが、その後次第に精神を病んでいき、1854年にはライン川への身投げによる自殺未遂を起こし、1856年に亡くなっています。シューマンにとってこの作品は最後の華々しいキャリアの“はじまり”であり、かつ終わりの“はじまり”でもあるかのような時期に作曲されたように感じます。人間の恋心を表しているような儚くどこか幻想的な魅力をお楽しみいただければと思います。

(出演順／学校名は奨学金給付時の在籍校)



松岡 井菜 Seina Matsuoka [ヴァイオリン]

2024年度奨学生
ウィーン国立音楽大学大学院

第2回カロル・シマノフスキ国際音楽コンクールをはじめ1年間に3つの国際コンクールで第1位を受賞。第28回青山音楽賞新人賞、第34回青山音楽賞バロックザール賞。ウィーン国立音楽大学室内楽科修士課程に在籍。

この作品は私にとって人生で初めて管楽器とアンサンブルをすることとなった思い出の曲です。クラリネットの魅力、音色の豊富さに気付かされた作品でもあり、私が室内楽的な音楽へのアプローチに重きを置くこととなった“はじまり”の作品でもあります。また彼の作品のなかで初めてソ連国外で演奏された作品でもあります。憂いをおびた旋律から、剣の舞などでも感じられるリズムカルでお祭り騒ぎのような部分まで、さまざまな表情が感じられる素敵な作品です。



保科 瑠衣 Rui Hoshina [ソプラノ]

2024年度奨学生
イタリア国立バルマ音楽院

東京藝術大学、同大学院独唱科卒業。イタリア国立バルマ音楽院声楽科を満点賛辞付き、特別賛辞を受け卒業。現在同音楽院古楽科に在籍。サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団、フィレンツェ歌劇場管弦楽団等とソリストとして共演。

モーツァルト《踊れ、喜べ、幸いなる魂よ》は、喜びと希望に満ち溢れた作品です。私自身のイタリア歌劇場デビューもモーツァルト作品であり、キャリアの“はじまり”を重ねてこの曲を選びました。初心を大切に、音楽の歓びをまっすぐ届けたいと思います。



北村 陽 Yo Kitamura [チェロ]

2023、2024年度奨学生
桐朋学園大学、ベルリン芸術大学

2024年ジョルジュ・エネスク国際コンクール、パブロ・カザルス国際賞、2023年ヨハネス・ブラームス国際コンクール、日本音楽コンクールにて優勝。現在、J.P.マインツ、堤剛各氏に師事。使用楽器は上野製薬株式会社より貸与された1668年製カッシーニ。

今回、私はコダーイ作曲「無伴奏チェロ・ソナタ」より第3楽章を演奏いたします。彼は長い年月をかけてハンガリーの村々を回り、土着の民謡や民族楽器の音色を録音しました。口伝いに受け継がれた素朴で力強い歌が、この曲のすみずみに生きています。彼の愛したハンガリーの大地が呼び覚ます“はじまり”を、皆様に感じていただけたらと思います。



山本 航司 Koji Yamamoto [サクソフォン]

2023、2024年度奨学生
パリ国立高等音楽院

東京藝術大学を首席で卒業。第37回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第2位(2022)、第10回アンドラ国際サクソフォンコンクール入賞(2024)など多くの実績を積み。現在はパリ国立高等音楽院の第2課程を修了し、同校の即興演奏科に在籍している。

ブルーノ・マントヴァニはフランスの現代音楽作曲家で、私がパリ音楽院に入学した当時の学長でもありました。この《Metal》を初めて聞いたとき、現代音楽とはこんなに「痺れる」のか!と強い衝撃を受けました。非常に巧みで複雑なリズム、2本の楽器による絶妙な音色の探求、そしてどこか呪術的なメロディが特徴で、ショッキングな冒頭から暴れ狂いながら終わる最後まで、彼の魅力が凝縮された作品です。一瞬も聞き逃すことがありませんよう!



島多 璃音 Riito Shimata [ピアノ]

2024年度奨学生
リヨン国立高等音楽・舞踏学校

第33回エットーレ・ボッツォーリ国際ピアノコンクール最高位および聴衆賞。第21回東京音楽コンクール第2位および聴衆賞。東京藝術大学を首席で卒業し、現在はフランスのリヨン国立高等音楽・舞踏学校第二過程(修士)に在籍、セバ스티アン・ヴィシャール氏に師事。

ラヴェルは、私にとって、フランス音楽の素晴らしさを教えてくれた作曲家です。音楽の美しさ、可憐さがありながら、時にグロテスクな題材を取り上げ、それを卓越された作曲技法でまとめあげる姿は、まだ高校生だった私に大きな衝撃を与えました…そんな私のフランス音楽人生の“はじまり”であるラヴェルから、可愛らしい「ボロディン風に」「シャブリエ風に」、そして作曲家自身のオーケストラ版、2台ピアノ版もあり、雄大な曲想が特徴の「ラ・ヴァルス」を皆様にお届けいたします。

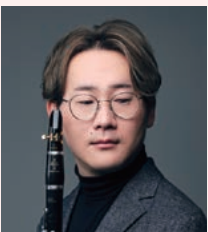


東方 理紗 Risa Toho [パイプオルガン]

2024年度奨学生
フライブルク音楽大学、ザルツブルク・モーツァルテウム大学

東京藝術大学、大学院修了。2023年メンデルスゾーン全ドイツ音楽大学コンクール(ベルリン)オルガン部門第3位。第9回武蔵野市国際オルガンコンクール第2位、聴衆賞受賞。現在フライブルク音楽大学国家演奏家資格課程在学中。

この作品は、軽やかで遊び心のあるパッセージ、ペダルのソロ、華やかな合奏のような部分から成るトッカータ、哀愁を帯びたアダージョ、快活なフーガ、とたくさんの魅力が詰まったバッハの名曲です。私が初めて大きな空間でのオルガンでバッハの作品を演奏したときに、その魅力に惹かれ、その経験が私にとっての“はじまり”となりました。本日は、バッハやオルガンの魅力を感じていただければ幸いです。



亀居 優斗 Yuto Kamei [クラリネット]

2023、2024年度奨学生
パリ・エコールノルマル音楽院、ヴェルサイユ地方音楽院

第90回日本音楽コンクール第1位、第73回ARDミュンヘン国際音楽コンクール木管五重奏部門セミアリストおよび委嘱新曲作品最優秀賞受賞。The Narmen Clarinet Ensemble、Quintet Itsuki各メンバー。神奈川フィルハーモニー管弦楽団首席クラリネット奏者。

初めて本格的な現代曲に触れたのが大学2年生のとき、B.マントヴァニの作品で私の現代音楽の“はじまり”とも言える作曲家です。本日演奏するメタルはポール・"メイ"エとミッシェル・ポール"タル"のために書かれた作品で2人の名前からとっています。オリジナルはクラリネット2重奏ですが、サクソス版も存在し、今回は同じパリで研鑽を積み山本くんと演奏したいと思います。2人とも同族楽器でこの作品を演奏したことがあり、この組み合わせで生まれる新たなサウンドがとても楽しみです。



室元 拓人 Takuto Muromoto [作曲]

2023、2024年度奨学生
ブローニュ=ビヤンクール地方音楽院、グラーツ国立音楽大学

第37回現音作曲新人賞入選、第90回日本音楽コンクール第3位、第11回JFC作曲賞入選、2022年度武満徹作曲賞第1位。東京藝術大学、ブローニュ=ビヤンクール地方音楽院を経て、現在グラーツ国立音楽大学に在学中。

ピアノのための《凍てつく火花》は、幼少期に体験した線香花火の記憶に基づいており、ピアノの音の透明感に、瞬く火のイメージを重ね合わせた作品です。クラリネットのための《シュヴィムシヒテン》は、ドイツ語で「泳ぐ地層」という意味で、メノウと呼ばれる美しい化石から着想を得ました。石を叩く奏法によって“はじまり”、原始的な音から次第に石の複雑な模様が浮かび上がるような作品です。ぜひ、それぞれの演奏で作品をお楽しみください。

(出演順／学校名は奨学金給付時の在籍校)



白井 翼

Tsubasa Shirai [チューバ]

2024年度奨学生

チューリッヒ芸術大学大学院

東京藝術大学を卒業後、チューリッヒ芸術大学大学院修士課程に在学中。第39回日本管打楽器コンクールチューバ部門第1位。第57回マルクノイキルヒェン国際器楽コンクールティンパロマ賞。第20、22回東京音楽コンクール第3位など国内外のコンクールで数多く入賞を果たす。ソリストとして数々のオーケストラと共演。

アレンスキーのピアノリオは、19世紀後半のロシア音楽を受け継いだ感情的なメロディラインが特徴なロマンティックな名作です。今回はチェロのパートをチューバに置き換え、新鮮な響きと調和の解釈をお届けします。チューバとヴァイオリンという正反対の楽器がアレンスキーの音楽に独特のテンションと陰影、色味を添え、深く美しい旋律を際立たせます。そんな新しい“はじまり”を、チューバのイメージを覆してしまうような技巧とアンサンブルで19世紀ロシアの情緒をぜひたっぷりと感じていただけたら幸いです。



坂口 由侑

Yu Sakaguchi [ピアノ]

2024年度奨学生

桐朋学園大学大学院

桐朋女子高等学校音楽科(男女共学)を経て桐朋学園大学音楽学部を卒業。現在、同大学院修士課程に待待生として在学中。第91回日本音楽コンクール第1位および岩谷賞(聴衆賞)、野村賞、井口賞、河合賞、アルゲリッチ芸術振興財団賞受賞。ほか多くのコンクールで入賞。

ブラームスの最後のピアノ作品です。彼自身の生涯を静かに見つめ直すような哀愁に満ちた音楽から“はじまり”、何か不安を抱えた焦燥感のある第2曲、無邪気な子供のころを思い出すような第3曲、そして最後は交響的でドラマチックなラブソディで締め括られます。終わりがなければ“はじまり”は来ないということで、今回はこの作品を演奏させていただきます。ブラームスの人生・音楽の境地を感じていただけると幸いです。



奥田 ななみ

Nanami Okuda [ピアノ]

2023、2024年度奨学生

パリ国立高等音楽院

文化庁新進芸術家海外研修制度、フランス財団等からの支援を受け、これまでに、東京藝術大学、パリ・エコールノルマル音楽院、パリ国立高等音楽院にて研鑽を積む。

ジャン＝パスカル・シェーニュ先生は私の恩師でもあり、「讃美歌Ⅳ」は自分のために先生が書いてくださった作品です。そしてストラヴィンスキーとプロコフィエフは、私の音楽人生の“はじまり”を作ってくれた作曲家です。さまざまな音楽語法を融合させ、それぞれの作曲家が音楽の新しい“はじまり”を作ろうとした作品でもあります。過去と未来の時間が繋がっていることを感じていただければ幸いです。



笠井 大暉

Hiroki Kasai [ヴィオラ]

2024年度奨学生

ソフィア王妃高等音楽院

英国王立音楽院を首席で卒業後ヴィオラに転向。第30回ヨハネス・ブラームス国際コンクール優勝(2024年)、第6回東京国際ヴィオラコンクール第2位&聴衆賞(2025年)。現在スペインのソフィア王妃高等音楽院で今井信子氏に師事している。マールボロ音楽祭はじめ世界中の国際音楽祭に出演。

モーツァルトをはじめ、本当に限られた作曲家のみがピアノ四重奏曲を作曲してきました。その様ななか、創作依頼など受けていないにも関わらず、フォーレは自ら室内楽をより深く理解するために、このピアノ四重奏第2番を作曲したと推測されます。故に、彼にとってこの曲は次なる境地へむかう“はじまり”の曲だと思います。この曲は各楽章、それぞれ個性が全く異なり、曲のなかに凝縮されたさまざまな感情に触れることができます。フランスの田園を感じさせる3楽章はヴァイオリストとして特に演奏するのが楽しみです。



水野 優也

Yuya Mizuno [チェロ]

2017、2018年度奨学生／協力出演

第76回ブラハの春国際音楽コンクール、第89回日本音楽コンクール、第13回東京音楽コンクールにて優勝。桐朋学園大学、ハンガリー・リスト音楽院、ザルツブルク・モーツァルテウム大学で研鑽を積む。



安並 貴史

Takashi Yasunami [ピアノ]

2024年度奨学生

ギルドホール音楽演劇学校

東京音楽大学大学院にて博士号(音楽)を取得。第14回シューベルト国際コンクール優勝。現在はロンドンのギルドホール音楽演劇学校アーティストディプロマ課程に在学し、R.オホラ、小川典子の各氏に師事。

アレンスキーのこの偉大なる作品を、今回初めての編成で取り組めることに感謝を申し上げます。この作品は単に抒情的なだけでなく、哀悼や激情を多く内包しています。まだ誰も聴いたことがないであろう調和の響きを、このピアノリオが持つ熱情的エネルギーとともに、この楽器の組み合わせでしか表せない音楽を皆様にお届けすることができれば幸いです。



五十嵐 健太

Kenta Igarashi [サクソフォン]

2024年度奨学生

東京音楽大学大学院

群馬県出身。幼いときに父を亡くし、ウクライナ人の母親とともにキウに移住。国内外で30以上の受賞歴を持ち、現在は演奏家として幅広く活動中。YANAGISAWAアーティスト。D'Addario Woodwinds日本公認アーティスト。

この作品はサクソフォンのために書かれたオリジナル作品でありフランスの風を感じさせるような音楽が特徴です。初めて聴く方でも楽しめる親しみやすさがありサクソフォンの魅力を伝えるには最適な作品だと思い選びました。私にとってクラシックサクソフォンの世界への“はじまり”を象徴する一曲であり今回は音楽にあまり馴染みのない方にもその美しい音色と豊かな表現力を感じていただけるよう心を込めて演奏したいと思います。



戸澤 采紀

Saki Tozawa [ヴァイオリン]

2023、2024年度奨学生

リューベック音楽大学、ベルリン芸術大学大学院

第85回日本音楽コンクール最年少優勝、ティボール・ヴァルガ国際ヴァイオリンコンクール最高位。国内外のオーケストラと多数共演。現在ベルリン芸術大学修士課程に在学中、並びにベルリン・フィルハーモニー管弦楽団カラヤン・アカデミー在籍。

今回演奏させていただくフォーレのピアノ四重奏曲第2番は、彼がより独自の作風に転換してゆくその最中に書かれた作品であり、私個人的に最も魅力的だと思う彼ならではの美しい転調も随所に見られ、まさにフォーレ自身の新たな世界の“はじまり”を彷彿とさせると思い選曲しました。この貴重な演奏会の場で、あえて実演機会の少ない2番を選んだのも、自分の新たな一面を開拓したいという思いもあり、尊敬する仲間たちとの演奏をこころより楽しみにしています。



牛田 智大

Tomoharu Ushida [ピアノ]

2023、2024年度奨学生

フレデリック・ショパン音楽大学

1999年福島県生まれ。第10回浜松国際ピアノコンクール第2位&聴衆賞(2018年)、第29回出光音楽賞(2019年)。フレデリック・ショパン音楽大学に在籍。ピオトル・パレチニ、下田幸二の各氏に師事。

フランスの作曲家フォーレの最高傑作のひとつであるカルテットを素晴らしい方々とともに演奏できることをとても光榮に思っています。彼はこの作品の第3楽章について「私はほとんど無意識のうちに、幼いころに訪れた渓谷で夕暮れに聞いた微かな鐘の音の思い出を音に描いた」と語っています。つまり記憶のなかに眠る過去の情景が作品の着想を導いたということで、これは作品の“はじまり”として興味深いケースの一つなのではないかという考えからこの作品に引き寄せられることになりました。皆様にお楽しみいただけることを願っています。

(出演順／学校名は奨学金給付時の在籍校)

S.ジェルバズーニ

：プレ VII Précieux、XI Pré carré

B.バルトーク

：ピアノ・ソナタ BB88/Sz.80

奥田 ななみ [ピアノ]

B.マントヴァニ

：メタル

亀居 優斗 [クラリネット]、山本 航司 [サクソフォン]

F.シューベルト

：4つの即興曲 Op.90 D 899 より 第1番

L.ドリーブ/E.ドホナーニ

：「コッペリア」より “ワルツ”

安並 貴史 [ピアノ]

—休憩—

J.ブラームス

：ピアノ・ソナタ 第1番 ハ長調 Op.1 より 第1、4楽章

坂口 由侑 [ピアノ]

R.シュトラウス

：歌劇「ナクソス島のアリアドネ」Op.60 TrV228a より “偉大なる王女様”

横山 和美 [ソプラノ]、奥田 ななみ [ピアノ]

F.ショパン

：アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 Op.22

重森 光太郎 [ピアノ]

—休憩—

S.プロコフィエフ

：「ロメオとジュリエット」より 抜粋

白井 翼 [チューバ]、安並 貴史 [ピアノ]

J.ブラームス

：ヴィオラ・ソナタ 第2番 変ホ長調 Op.120-2 より 第1楽章

笠井 大暉 [ヴィオラ]、重森 光太郎 [ピアノ]

J.ブラームス

：ハイドンの主題による変奏曲 Op.56b (2台ピアノ版)

樽谷 公平 [ピアノ]、島多 璃音 [ピアノ]



©Mai Toyama

奥田 ななみ Nanami Okuda [ピアノ]

2023、2024年度奨学生
パリ国立高等音楽院

文化庁新進芸術家海外研修制度、フランス財団等からの支援を受け、これまでに、東京藝術大学、パリ・エコールノルマル音楽院、パリ国立高等音楽院にて研鑽を積む。

ステファノ・ジェルバザーニ先生の作品は、小品ながら彼の頭のなかの可能性がたくさん詰まった作品です。今回はそのなかから抜粋して演奏させていただきます。また、バルトークのソナタは、打楽器的要素を古典的な形式を用いて作曲された作品です。新たな可能性を探すというのは“はじまり”を作り出すうえでとても重要なことだと思っています。たくさんの可能性を楽しんでいただければ幸いです。



©Taiga Tairadate

亀居 優斗 Yuto Kamei [クラリネット]

2023、2024年度奨学生
パリ・エコールノルマル音楽院、ヴェルサイユ地方音楽院
第90回日本音楽コンクール第1位、第73回ARDミュンヘン国際音楽コンクール木管五重奏部門セミアイナリストおよび委嘱新曲作品最優秀賞受賞。The Narmen Clarinet Ensemble、Quintet Itsuki各メンバー。神奈川フィルハーモニー管弦楽団首席クラリネット奏者。

初めて本格的な現代曲に触れたのが大学2年生のとき、B.マントヴァニの作品で私の現代音楽の“はじまり”とも言える作曲家です。本日演奏するメタルはポール・“メ”イエとミッシェル・ボル“タル”のために書かれた作品で2人の名前からとっています。オリジナルはクラリネット2重奏ですが、サクソ版も存在し、今回は同じくパリで研鑽を積む山本さんと演奏したいと思います。2人とも同族楽器でこの作品を演奏したことがあり、この組み合わせで生まれる新たなサウンドがとても楽しみです。



©Junichiro Matsuo

重森 光太郎 Kotaro Shigemori [ピアノ]

2024年度奨学生
パリ・エコールノルマル音楽院、桐朋学園大学
2022年ロン＝ティボー国際コンクールピアノ部門第4位など多数のコンクールにて上位入賞。ソリストはじめ、伴奏や室内楽においても積極的に取り組み、「ピアノの本」にて留学誌のコラムを掲載するなど、多方面にて活動。

ポロネーズの作品のなかでも極めて美しく華やかさがあかつ長大な作品の一つであり、彼がこの作品に至るまでの人生観の全てを描いているようです。この作品は、1831年に管弦楽とピアノによるポロネーズの一部であり、後に前奏曲が加えられ「アンダンテ・スピアナート」と題し、現在のピアノ独創版とともに出版されました。僕はこの作品と向き合って、ショパンの一音一音に大きな喜びが満ち溢れていると感じ、とても大好きな作品です。その気持ちを皆様と共有できたら嬉しいです。



白井 翼 Tsubasa Shirai [テューバ]

2024年度奨学生
チューリッヒ芸術大学大学院
東京藝術大学を卒業後、チューリッヒ芸術大学大学院修士課程に在学中。第39回日本管打楽器コンクールテューバ部門第1位。第57回マルクノイキルビェン国際器楽コンクールティプロマ賞。第20、22回東京音楽コンクール第3位など国内外のコンクールで数多く入賞を果たす。ソリストとして数々のオーケストラと共演。

プロコフィエフの「ロメオとジュリエット」は、20世紀初頭のロシア音楽における劇的な表現と革新的な和声が融合した傑作です。この公演では、原曲のオーケストラパートをテューバとピアノ用に編曲し、新たな音響効果を目指しました。ピアノ伴奏が音楽を支えテューバの表現力の可能性を余すことなく提示します。プロコフィエフはテューバのための作品を残しませんでした。テューバの深く力強い音色は鮮烈で劇的なリズムと旋律を持って物語の感情や心理的緊張を再現します。シェイクスピアの悲恋を音楽で描いたこの作品の構造と深い情感が、テューバの響きに新たな可能性の光を放ちます。テューバの可能性とロマン派の遺産が交錯する新しい“はじまり”を、ぜひご堪能ください。



山本 航司 Koji Yamamoto [サクソフォン]

2023、2024年度奨学生
パリ国立高等音楽院

東京藝術大学を首席で卒業。第37回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第2位(2022)、第10回アンドラ国際サクソフォンコンクール入賞(2024)など多くの実績を積み。現在はパリ国立高等音楽院の第2課程を修了し、同校の即興演奏科に在籍している。

ブルーノ・マントヴァニはフランスの現代音楽作曲家で、私がパリ音楽院に入学した当時の学長でもありました。この《Metal》を初めて聞いたとき、現代音楽とはこんなに「痺れる」のか!と強い衝撃を受けました。非常に巧みで複雑なリズム、2本の楽器による絶妙な音色の探求、そしてどこか呪術的なメロディが特徴で、ショッキングな冒頭から暴れ狂いながら終わる最後まで、彼の魅力が凝縮された作品です。一瞬も聞き逃すことがありませんよう!



©Yutaro YAMADA

安並 貴史 Takashi Yasunami [ピアノ]

2024年度奨学生
ギルドホール音楽演劇学校

東京音楽大学大学院にて博士号(音楽)を取得。第14回シュベルト国際コンクール優勝。現在はロンドンのギルドホール音楽演劇学校アーティストディプロマ課程に在学し、R.オボラ、小川典子の各氏に師事。

出だしのG音によるオクターブで幕を開けるシュベルトの即興曲第1番は、無限に広がっていく空間への当て所ない旅を想起させます。対照的に、ドリーブによるコッペリア的一幕を見事にヴィルトゥオーゾに仕上げたドホナーニのワルツは、これから起こるあらゆるポジティブな“予感”を思わせる出だしです。どちらの作品も“はじまり”からその終わりまで、心ゆくまでお楽しみください。私の音楽人生にさまざまな“はじまり”を与えてくれた両作曲家に感謝の念を込めて演奏いたします。



©Juri Hiensch

笠井 大暉 Hiroki Kasai [ヴィオラ]

2024年度奨学生
ソフィア王妃高等音楽院

英国王立音楽院を首席で卒業後ヴィオラに転向。第30回ヨハネス・ブラームス国際コンクール優勝(2024年)、第6回東京国際ヴィオラコンクール第2位&聴衆賞(2025年)。現在スペインのソフィア王妃高等音楽院で今井信子氏に師事している。マールボロ音楽祭はじめて世界中の国際音楽祭に出演。

創作活動を中断していたブラームスが晩年クラリネット奏者のリヒャルト・ミュールフェルトに出会い、クラリネットのためにクラリネット三重奏、五重奏、また2つのソナタを作曲しました。ブラームス自身がヴィオラ用を書き換えたこの作品120番はブラームスが生涯最後に作曲したソナタ作品で、ブラームスの優しさ、切なさ、雄大さ等全てが詰まった傑作です。3年前ヴィオラを始めたときに恩師の今井信子先生から一番初めに出された課題曲で、僕にとってはヴィオリストとして生きていく“はじまり”の曲です。



樽谷 公平 Kohei Taruya [ピアノ]

2024年度奨学生
チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院

大分県別府市出身。第29回ヨハネス・ブラームス国際コンクール第3位、日本音楽コンクール第3位等さまざまなコンクールで入賞。現在チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院に在籍し、エリソ・ヴィルサラーゼ氏の元で更なる研鑽を積んでいる。

ブラームスはとても多くの室内楽曲やオーケストラ作品を残しました。今回演奏する「ハイデンの主題による変奏曲」は、今日、オーケストラ作品として有名になっていますが、“はじまり”は2台ピアノとしてでした。曲のどの部分を切り取っても完成度が高いこの曲を演奏できることを嬉しく思いますし、少しでも皆様に楽しんでいただけたら幸いです。



坂口 由侑 Yu Sakaguchi [ピアノ]

2024年度奨学生
桐朋学園大学大学院

桐朋女子高等学校音楽科(男女共学)を経て桐朋学園大学音楽学部を卒業。現在、同大学院修士課程に特待生として在学中。第91回日本音楽コンクール第1位および岩谷賞(聴衆賞)、野村賞、井口賞、河合賞、アルゲリッチ芸術振興財団賞受賞。ほか多くのコンクールで入賞。

ブラームスの最初に出版されたピアノ作品です。この作品はピアノソナタ第2番とスケルツォOp.4よりもあとに作曲されていますが、ブラームスは自信を持っていたこのソナタを作品1として出版しました。彼の作曲家としての“はじまり”の作品です。若きブラームスの溢れんばかりのエネルギーと若々しさ、ベートーヴェンへの惜しめないリスペクト、そして彼の軸である交響的な音楽をお楽しみいただけると幸いです。



©FUKAYA Yoshinobu auraY2

横山 和美 Kazumi Yokoyama [ソプラノ]

2024年度奨学生
ウィーン市立音楽芸術大学

東京藝術大学大学院博士課程修了。ウィーン市立音楽芸術大学卒業。第86回日本音楽コンクール声楽部門第2位、岩谷賞。文化庁令和2年度新進芸術家海外研修制度研修員。

リヒャルト・シュトラウスの《ナクソス島のアリアドネ》は、悲劇と喜劇が交差する作品です。ツェルビネッタのアリア「偉大なる女王様」は、失恋に沈むアリアドネに「新たな恋が始まる」と語りかけます。超絶技巧のコロラトゥーラとユーモアにあふれた語り口が魅力で、「終わりの先には“はじまり”がある」という希望を伝えるアリアです。



島多 璃音 Riito Shimata [ピアノ]

2024年度奨学生
リヨン国立高等音楽・舞踏学校

第33回エッソーレ・ボッツォーリ国際ピアノコンクール最高位および聴衆賞。第21回東京音楽コンクール第2位および聴衆賞。東京藝術大学を首席で卒業し、現在はフランスのリヨン国立高等音楽・舞踏学校第二過程(修士)に在籍、セバスティアン・ヴィシャル氏に師事。

恥を忍んで白状してしまいますと、ブラームスという作曲家は私自身あまり親しみのある作曲家ではなく、勉強したことがある曲は、ピアノ曲・室内楽曲を合わせても片手で数えられるほど……しかし、“はじまり”というテーマをいただいたからには飛び込まねば! 樽谷先輩のお力もお借りして今日ブラームスデビューを果たします! この作品はテーマに続く9つの変奏を通して、ブラームスの自由ながら芯のある変奏・作曲技法を感じられる曲です。荘厳かつ遊び心あるこの曲で、今年のスカラシップコンサートを締めくくります!!



Neue Musikから新音楽へ ——日独関係史を通じた日本におけるモダニズム音楽史 1915～1957年——

1. 日本と西洋芸術音楽／日本とNeue Musik

明治維新以降、日本で本格的に西洋芸術音楽〔以下「洋楽」〕が受容された過程、すなわち洋楽受容史の研究は、これまで数多くの問いに答えてきました。例を挙げれば、日本が国家レベルで洋楽受容のインフラストラクチャーを整えた背景には、文化外交の場で西洋列強と肩を並べんとする動機があったことや、大半の日本の洋楽受容者たちにとって「ドイツ音楽」(特に古典派・ロマン派)がオーセンティックなものとして尊ばれたこと等は広く知られています。これらの研究は、日本には、日本固有の政治的問題意識と美的感覚に導かれた独自の洋楽受容のあり方があったことを明らかにしてきたわけです。言い換えれば、日本は単に受動的な存在として西洋世界から洋楽を取り入れたのではなく、むしろ能動的に「日本における洋楽史」を形作ってきたと言えます。

そうした洋楽受容のレパートリーの中心にあったのが、ベートーヴェンやブラームス、ヴァーグナー等の「歴史的遺物」であった一方で、「今日的なもの」であった音楽、すなわち同時代に作曲された作品はどのように受容されていたのでしょうか?とりわけ、だいたい第一次大戦前後に生じた「新音楽 Neue Musik」と呼ばれる技法的革新を至上命題とするような前衛的な音楽は、当時の日本人にとってそう簡単に理解できるものではなかったと想像されます。率直に言えばそれは、新音楽は基本的に「よくわからない」からです。例えば、上述したようなドイツ古典派・ロマン派の傑作が、万人の心を揺さぶる美しさと迫力を備えているという主張に反論する人はあまりいないでしょう。他方、シェーンベルクやストラヴィンスキーによる新音楽の歴史的傑作は、今でこそ多くのファンに支えられているものの、彼らと同時代を生きた人々にとって必ずしも問答無用で賞賛された作品ではありませんでした。

前提として、音楽を含む諸芸術は、その歴史的価値が一般に認知されるまでに、長い年月をかけて構築された分厚いフィルターを経るものです。そのフィルターとは、人々による多様な作品解釈や評価、そしてそれらを総合した研究の蓄積から成り立っています。そのフィルターを経ることによって、ようやく我々は一定の自信を持ってある作品の歴史的 position付けを判断できるようになります。ですが、それが生まれたばかりの、時代の最先端を行くような作品であった場合、人々は即時的に構築された薄いフィルターを通してしか、その芸術的真価に対峙することができないのです。とりわけ、戦前から戦後にかけてドイツを中心に隆盛を極めた新音楽の評価に関して言えば、洋楽を受容し始めてからせいぜい数十年ほどしか経っていない頃の日本における不十分なフィルターでは、その価値を捉えるのに大きな障壁がありました。つまり、本場西洋の場合と比べて、当時日本では聴覚的に体験可能であった楽曲がまだ非常に限られており、尚且つ洋楽の歴史を深く理解するために必要な文献へのアクセスも不十分であったため、未成熟な日本人の「耳」と知識的背景で新音楽と向き合うことには避け難い困難があったわけです。

2. 日本における音楽的モダニズム:「受容」から「創造」へ

ですが、どんな時代にも上述したような困難に立ち向かった変わった人があるというのが世の常。たとえその中の大多数の人が「なんて酷い音楽だ」と安直に蔑視するような作品であったとしても、純粋な好奇心やなんらかの使命感に導かれた一部の好学者たちは、一見(一聴)すると訳がわからないような作品に真正面から向き合い、その芸術的価値を探究するための真摯な言葉と音楽を紡ぎ出し続けたのです。

私の研究は、日本の洋楽史を支えたそんな好学者たちが紡いだ真摯な言葉と音楽が、日本における新音楽を巡る専門知の文化移転をいかにして可能にしたのか、という問いに答える試みと言えます。この問いの答えを導くための鍵として、私は1915年から1957年までの戦前から戦後に跨る時代を調査対象時期に設定し、日独関係を中心とするグローバル音楽史の枠組みで「日本におけるモダニズム音楽史」を再構築することを目指しています。その歴史とは、単なる日本における新音楽の受容史ではなく、むしろ日本が自らの音楽的モダニズムを知識・実践の両面から作り上げた、創造史と呼ぶべきものです。

少々前置きが長くなってしまいましたが、以下ではもう少しだけ詳しく、私が現在取り組んでいる研究の内容についてご紹介させていただきます。

調査対象時期の両端となる1915年と1957年という年は、特に「ドイツ」という当時の日本にとっての理想的文化空間から日本が洋楽を受容した歴史上、画期を成す年であったと思われます。まず1915年、日本における音楽評論の嚆矢の一つである大田黒元雄『バッハよりシェーンベルヒ』が出版されました。「シェーンベルヒ」とは、あの無調・十二音音楽のシェーンベルクのことで、管見の限りこの著作は日本で初めてシェーンベルクを紹介した音楽専門書でした。彼は1915年時点ではまだ十二音技法には至ってはいみせませんが、大田黒は「シェーンベルヒは今のところあまりに奇に走り過ぎて、混沌たる感じがされるが、彼が一種の不思議な天才である事と、驚くべき独創力を有して居る事は明らかである。」¹と評しています。



大田黒『バッハよりシェーンベルヒ』巻頭

さらに、大田黒は同書中の「シェーンベルヒ」の一つ前の章で「ストラヴィンスキー」について論じており、その二人を時代の最先端を行く作曲家として伝えました。従って、1915年は、日本の音楽界で両作曲家を中心とするモダニズム音楽の可能性への目が開かれた年であったと考えられます。

他方、1957年には、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の初来日演奏会がありました。指揮者はあのカラヤン。世界で最も有名で高級な管弦楽団の一翼の生演奏が初めて日本で鳴り響いたこの年は、日本における洋楽受容史上のメルクマールとして数えられます。とりわけ、その日本人が待ちに待った演奏会のプログラムの中に、ストラヴィンスキー《火の鳥》(1910)とヒンデミット《交響曲「画家マティス」》(1934)という新音楽のレパートリーが含まれていたことは注目に値します。山根銀二によるこの演奏会のプログラムノーツ上で、ストラヴィンスキーは「現代音楽の教祖の一人、その最大なもの」と評され、ヒンデミットは「ドイツ音楽がシュトラウス以後あたらしい局面へすすんだとき、一方の旗頭としてあらわれた巨匠の一人」と説明されています²。ここで言及されていない「もう一方の旗頭」は、言わずもがなシェーンベルクのことを指しているはずです。



1957年ベルリン・フィル演奏会チケット

3. まとめに代えて:日本におけるモダニズム音楽史の語りのために

上に述べた1915年と1957年をポイントとして日本における新音楽の受容を考えると、やはりシェーンベルク、ストラヴィンスキー、ヒンデミットの三人が重要な役割を果たしていたことがわかります。これは別に日本に特有の現象ではなく、モダニズム音楽史の語り方として今日まで続くセオリーではあります。ですが、それ故にここで露わになっているのは、音楽とそれを巡る専門知が異文化間を越境する「移動性 mobility」³を有するものであるという事実です。ドイツから日本への新音楽の移動及び定位の過程に寄与した人々や事象(「モビライザー」⁴)の実相を解明するためには、日独双方での多角的な検証作業を要します。私の研究はまだ始まったばかりですが、「ドイツからの借り物としての Neue Musik」でなく、「日本独自の新音楽」として音楽的モダニズムを実現しようとした戦前・戦後の「好学者」たちへの敬意を抱きつつ、引き続き私も真摯に言葉を紡いでいく所存です。

- 1 大田黒元雄『バッハよりシェーンベルヒ』、音楽と文学社、1915年、362頁。
- 2 山根銀二「曲目解説:ストラヴィンスキー、ヒンデミット」、『ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団日本公演プログラム』、1957年、33～34頁。
- 3 音楽学領域における「モビリティ研究」の有効性については、例えば以下を参照。Grosch, Nils, “4.1. Musik und kulturelle Mobilität,” *Musik und Migration: Ein Theorie- und Methodenhandbuch*, edited by Wolfgang Gratzner et al., Waxmann Verlag, 2023, pp. 325–349.
- 4 Greenblatt, Stephen, “A Mobility Studies Manifesto,” *Cultural Mobility: A Manifesto*, edited by Stephen Greenblatt et al., Cambridge University Press, 2010, pp. 250–253.



千葉 豊 Yutaka Chiba [音楽学]

2024年度奨学生／ライン・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学ボン

東京藝術大学音楽学部楽理科を卒業。同大学院修士課程を修了。2021年より同大学院博士課程に在籍中。同声会賞、大学院アカンサス音楽賞等受賞。日本学術振興会特別研究員(DC1)。

日本が西洋音楽を本格的に受容しはじめたのは、百五十年ほど昔のこと。それは、数多の日本人がその音楽的伝統／革新を世界一流の舞台上で体現する今日へと続いています。「西洋」という他者が長い歴史の中で培ってきた音楽を、日本はいかにして自己の文化として吸収し、今やその音楽文化の国際的中心となるまでに至ったのでしょうか?私の研究は、そんな日本という特異な場における西洋音楽の“はじまり”を探究し、音楽が洋の東西を飛び越えていった旅路を巡る試みです。

ローム ミュージック ファンデーションの奨学援助事業

ロームミュージックファンデーションの奨学援助事業は、1991年の財団設立以降、30年以上に渡り継続して実施され、2024年度までに計557名（約32億7,986万円）もの学生をサポートしてまいりました。特に近年では、ショパン国際ピアノコンクール、ARDミュンヘン国際音楽コンクール、エリザベート王妃国際音楽コンクール等の難関国際コンクールでの入賞者を多数輩出するなど、新進気鋭の音楽家たちの成長を支えています。

◇給付金額：月額30万円（返済不要）

◇給付期間：1年間（更新可）

※年齢制限、専攻楽器・専攻分野による制限がないため多くの方がチャレンジ可能な制度となっております。

また、奨学生期間中に今後の音楽活動に必要な力を伸ばしていただきたいという思いから、奨学金の支給以外にも独自のサポートを実施しています。

◆認定式・報告会

年に一度、現役奨学生が京都に集まり、奨学生期間の抱負、報告を発表する式典を行っています。懇親会も開催し、今後の音楽活動に欠かせない同年代のさまざまな分野の音楽家との交流の場となっています。



◆アーティスト研修会

外部から特別講師を招へいし、今後音楽家として必要な「プレッシャーに克つメンタルの作り方」などの講義をしていただいています。学校では学ぶことのできない内容も多く、受講した奨学生から毎年好評を得ています。



◆スカラシップ コンサート

奨学生期間の学びの成果を披露する場として開催しています。第三者が決めたプログラムを演奏するのではなく、奨学生が中心となってプログラムを決めることにより、主体的に考え行動し、ご自身で1つのステージをつくる力を身に付けていきます。



* ©Ayumi Kakamu, 他 ©佐々木卓男

2026年度奨学生募集中 【締切：2025年9月8日（月）17：00 ※日本時間】

- 応募資格
- ・日本国籍を有し、国内外の教育機関で音楽を学ぶ方
または外国籍を有し、日本の教育機関で音楽を学ぶ方
（入学を予定している方も応募可）
 - ・年齢不問
 - ・更新は1回まで可（最大2年間）。ただし新たに応募申請が必要
 - ・実技審査、面接日のいずれにも出席可能な方
[京都市内にて2026年3月4日（水）、5日（木）]
- 選考方法
- ・第一段審査
提出書類、映像、音源に基づく審査
 - ・第二段審査
第一段審査通過者に対する実技審査および面接
実 施 日：2026年3月4日（水）又は3月5日（木）
実施場所：京都市内（詳細は第一段審査通過者へお知らせいたします。）
- 最終選考結果
- 2026年3月末に連絡予定

応募についての詳細はこちら



これまでの奨学生の声

水野優也さん／チェロ専攻（2017、2018年度奨学生）

自分のやりたいことを全て実現させてくれたのが、RMF奨学金だったと思います。



©Yuji Ueno

向井響さん、航さん／作曲専攻（2019、2020年度奨学生）

作曲家は自身で活動の幅を広げていく必要がありますが、その際に奨学金は大きな支えでした。



©Ayane Shindo



全文はこちら…

ローム ミュージック ファンデーションがこれまで支援した奨学生574名は世界各国で活躍しています。
そして本日のスカラシップ コンサートで演奏を披露する奨学生たちも、これから大きく世界に羽ばたいていきます。
あたたかい応援を引き続きよろしくお願いいたします。